

## 情報モラル教育の推進に向けて

所属校：江戸川区立清新第一小学校  
氏名：丸山 岳也  
派遣先：玉川大学教職大学院

キーワード：情報モラル教育・ネットいじめ、体験活動

### I 研究の目的

#### 1 高度情報化社会への対応の必要性

21世紀は、新しい知識、情報、技術が政治・経済・文化をはじめとする社会のあらゆる領域での活動に重要性を増す、いわゆる「知識基盤型社会」の時代と言われている。そのような中で、人々は、確かな情報を迅速に収集・処理・発信することが求められている。

インターネット、携帯電話の急速な発展は、人々の生活をより豊かにし、その利便性を高めている。特に、携帯電話は、単なる通信機器としてだけでなく、総合メディア機器としての機能を持ち、その所有率を高めている。東京都教育委員会の調査では、小学生の38%、中学生の66%、高校生の96%が携帯電話を所有している。

インターネットの利用率、携帯電話の所有率が高まる一方で、インターネット、携帯電話を介したトラブルも増え、携帯電話を禁止、規制をする動きが報じられている。

東京都教育委員会の調査では、教員の96.4%がインターネット、携帯電話を介したトラブルや被害者への対応について、「喫緊の課題」、「重要な課題」と回答しているが、その内の66.8%がどのように対応すればよいか分からないと答えている。

本研究では、現在の児童・生徒のインターネット、携帯電話における現状を把握し、その問題点を明らかにし、情報モラル教育を推進していくための方向性を示したい。

### II 研究の方法

#### 1 各種調査結果の収集、分析

児童・生徒のインターネット、携帯電話の使用状況、トラブルの状況の調査結果を収集し、分析する。

#### 2 文献研究

ネットいじめ、学校裏サイト、生活指導上の問題に関する文献を研究する。

### III 研究の結果

#### 1 児童・生徒の携帯電話の禁止、規制について

児童・生徒にとって、携帯電話は単なる情報機器ではなく、総合メディア機器であり、自分を表現するアイテムである。児童・生徒は携帯電話に熱中し、ケータイ依存といった問題も指摘されている。

各地で児童・生徒の携帯電話の校内持ち込み禁止、規制の動きが報じられている。

深谷は、「子供が熱中する物」、「楽しみな物」を「fun」と名付けている。携帯電話は今の子供たちにとって一つの「fun」であろう。

大人たちは今までに何度もそれら「fun」に禁止、規制を行ってきた。しかし、このような子供が熱中するものに対する禁止、規制は取りあえずの対応でしかなく、画一的な手段は有効ではないと述べている。全ての子供たちが「fun」に熱中するわけではない。

「fun」に熱中する児童・生徒は、友達から孤立しがちで、自分に自信がもてず、体調の悪さや意欲のなさがあがり、生活が乱れている傾向がある。<sup>1</sup>「fun」に熱中する子供がそのような傾向があるとするのなら、画一的に禁止、規制をするよりも、児童・生徒一人一人の人間関係に目をむけ、学校、家庭での居場所を築くことが大切であると考える。

#### 2 携帯電話の所有理由と利用方法

児童・生徒の携帯電話の所有率は学年が上がるに伴い、高くなっていく。小学生のころは、家庭との連絡用に携帯電話を手にする子供が多い。中学生になると入学祝いなどでその所有率は高まるが、家庭との連絡用として使用している場合が多い。高校生になると、「友達が持っているから」という理由で手にする子供が多くなる。初めは家庭との連絡用として手にした携帯電話が、学年が上がるに従って、友達との連絡用に使われていくことが分かる。

また、使用方法も学年が上がるに従ってメールの使用が多くなることが分かる。児童・生徒が電話よりメ

<sup>1</sup> 児童心理 2008 10月臨時増刊 (p 2)

ールを多く使う理由として、メールの方が安いこと、用件だけ伝えられること、相手の都合を考えなくてもよいことなどが考えられる。しかし、大人の社会ではメールのやり取りが事務的であっても人間関係がこわれることはないが、子供たちの社会では、メールの文章が会話文として表現されるので、表情や態度を想像するしかなく、ともすると誤解を生ずることにつながってしまうことがある。

メール依存の問題では、子供たちの同調意識が働いていると指摘されている。子供たちは、同調することに安心感を覚え、それが異質な他者への排除にも作用していると言われている。

このように考えると、メールのやり取りの中で生じるトラブルやメール依存の問題も、普通の児童・生徒の人間関係が大きく影響しており、それを改善していくことが重要であることが分かる。

### 3 学校裏サイトの認知度

文部科学省の調査（青少年が利用する学校非公式サイトに関する調査）では、学校裏サイト（学校非公式サイト）は全国に39,260サイトあることが報告されている。マスコミでも学校裏サイトの危険性を訴える報道があるが、児童・生徒の認知度は調査対象者の33%と意外に低いことが分かる。

渋井は、「学校裏サイト」はもう時代遅れで、プロフやブログなどにおけるトラブルに対応していく必要があると述べている。<sup>2</sup>

### 4 ネットいじめの現状

文部科学省の調べでは、インターネット、携帯電話を介して行ういじめ（ネットいじめ）が昨年度6,899件確認され、その前の年よりも1,000件増加したと報告されている。

このようなネットいじめは、ネットの世界だけで起こるのではなく、普段の人間関係の延長線上で起こるものである。ネットいじめを解決していくためには、子供たち一人一人が豊かな人間関係を築くことができるように支援していく必要がある。

学校は、家庭と連携を取り、いじめの早期発見、早期解決に努めなければならない。しかし、ネットいじめは今までのいじめとは違う点があり、それが、発見、解決を遅らせていることもある。学校は、ネットいじめの特徴を理解し、学校での対応マニュアルを作成し、研修の充実を図り、早期発見・早期解決できるように、学校全体で取り組んでいく必要がある。

## 5 情報モラル教育を推進していくために

### （1）情報に対する正しい理解と判断力の育成

#### ① コンテンツを活用し、疑似体験

情報に対する正しい理解と判断力を育成するために、各地で様々な取組が行われている。その一つにインターネット上のコンテンツを活用して学習する方法がある。疑似体験を通して、ネットの危険な面を理解したり、危機回避能力を身につけたりすることができる。

#### ② ネット中傷を疑似体験

「模擬掲示板システム」を使って、実際に書き込みを行い、送信をする。書いた時の気持ち、書かれたものを受け取った時の気持ちが疑似体験を通して考えることができる。「嫌な気分になった。」「学校に行きたくなくなる気持ちが分かる。」という感想からも相手の気持ちを考えるのに有効な手段であることが分かる。

### （2）モラル教育の充実と豊かな人間関係の育成

#### ① ルールを守ることの大切さの指導

ルールとモラルの違いをはっきりさせ、ルールを守ることの大切さを教える必要がある。情報モラル教育においても、ネットいじめでの誹謗・中傷や個人情報の流出は、人権侵害であり、法律で罰せられるものであることを指導することが大切である。

#### ② 体験活動を通して、豊かな人間関係の育成

子供たちは、他者、社会、自然・環境の中での体験活動を通して、豊かな人間性や規範意識をはぐくむことができる。学校生活の中での様々な行事や体験活動で、子供たちの普段では見られない一面を見ることができる。子供たちの良さを認めて励ましてあげること、それが自分に対しての自信となり、他者を認めることができる力をはぐくむことができるのではないかと考える。

## IV 考察

各種調査を分析した結果、児童・生徒のインターネット、携帯電話を介した様々な問題は、普段の人間関係が大きく影響していることが分かった。情報に関する指導だけでなく、特別活動や道徳教育、人権教育を通して、人間関係作りを充実させていく必要がある。情報モラル教育だけでなく、学校経営の中の一つとして、PDCAサイクルにあてはめて考えていくことが大切である。

そして、学校、家庭、地域社会、関係諸機関と連携し、子供たちが情報社会で適正に行動するための考え方や態度を身に付けられるように、これからも指導の方法を工夫していく必要がある。

<sup>2</sup> 前掲注1（p34）

